

「コヘレトの言葉」における隠された神信仰 ——コヘレト 11:5 ~ 12:7 (8) を手立てとして——

矢澤美佐子

序 論

「コヘレトの言葉」は福音なのか。「空の空、いっさいは空である」。因果応報を語り、正しい生活をする者にこそ希望が与えられると説く伝統的な知恵に対して、コヘレトは痛烈な批判を与えた。コヘレトはこの世の知恵や知識ではかり知ることのできない、恐ろしいほどの不可思議なものの前に立たされ「すべては空しい」と、人間の側の破産宣告をするしかなかった。この無意味さの緊張に捉えられ「コヘレトの言葉」に神への信頼の欠如を見るものは、コヘレトには神への信仰がないと判断する。

しかし、12:1でコヘレトは「創造主を覚えよ」と勧告する。この言葉を我々は、どう理解すれば良いのだろうか。コヘレトの無価値無存在感を十分に認識するならば、神に対する信仰を全く捨て去るほうが、むしろ当然と思われるからである。それゆえ、「創造主を覚えよ」という勧告の言葉を、神への信仰に至るはずのない他のものに読み替えてしまうのが良いという結論にすらなりうる。

また、「コヘレトの言葉」の叙述には多くの矛盾があり混乱がある。その為に、コヘレトの混乱した叙述の中に一貫した論理を見出そうと、語数分析、構造分析、編集史的考察などが指摘されてきた。しかし、それらは必ずしも成功しているとは言いきれない。当然のことながら、コヘレト研究ではテキストの統一性というのはほとんど問題にされなかった。

そこで、この論文では、「コヘレトの言葉」に一貫する論理と構造があるのだろうかという疑問から始め、12:1で語られる「創造主を覚えよ」は、何を意味しているのかを中心として、コヘレトが主張するメッセージに、より忠実に迫ることを研究の目的とする。

第一章 コヘレトの中心主題とは

第1節 「コヘレトの言葉」の主題による統一

無神論的書物であると言われてきた一方で、特に12:1には「創り主を覚えよ」¹⁾と訳すことが可能な、神を崇める言葉が記されている。そのうえ、コヘレトの後半部へ進むに連れ、神の創造用語²⁾が際立って出現することは興味深い。従って、本論文ではコヘレトの語ろうとする主張を捉えることを目的とし、特に後半部12章に注目し探求を試みる。

まず、この第一章ではコヘレト書全体の構造について論じる。これまでコヘレト書は、編集史的アプローチのもとで導き出されたものが多く、コヘレト書全体にある矛盾や論理的飛躍は、テキストの編集を前提にしたことで容易に解決されてきた。しかし、ここに疑問が生じる。それは、コヘレト書全体に統一的结构は見出せなくとも問題にはならず、編集史的に解釈することで納得しているという点である。確かに、矛盾や論理的飛躍のためにそうせざるを得えなかった面もあるが、しかし構造が見出せないという結論を前提にした捉え方では、正確なコヘレト書のメッセージを読み取れていないと言わざるを得ない。そこで本論文では、無造作に並べられ、矛盾や論理的飛躍があるという考えをもう一度見直し、構造に注目し分析を試みる。

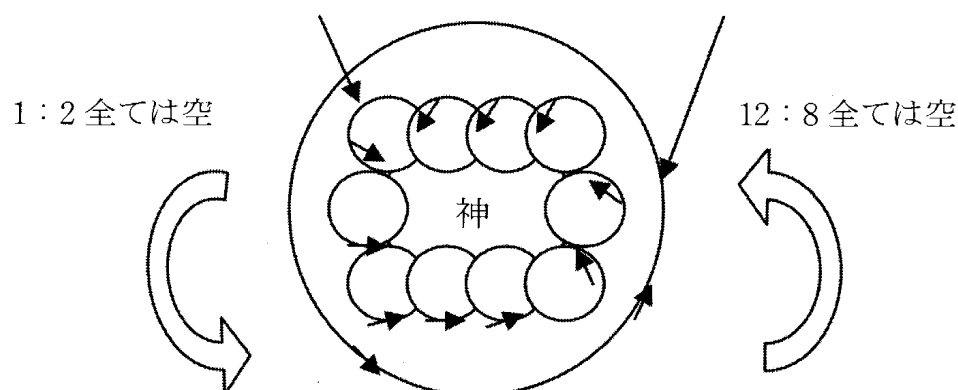
まず、コヘレト書全体の内容をテーマごとにA～Gに分類することができる³⁾。

→「創造・与える」 A 神のもとから → B 神の業は分からない → C carpe diem
 → D 神の不変・神を畏れる → E 全てあった物はまた → F 裁き → G 神のもとへ
 「一つのところへ」

この内容は重要なパターンであり、その内容から「神の創造と終末」パター

ンとして捉えることとする。このパターンは、最初と最後に「神」が配置されており、「神」のもとから「神」のもとへと同じ「神」によって結び付けられている。つまり、創造の業と終末の業をされる「神」によって、最初と最後が *inclusio* (囲い込み)⁴⁾ となっている。これを「神の絶対性を表す *inclusio*」と呼ぶことにする⁵⁾。

図1 「神の絶対性を表す *inclusio*」と「人の空しさを表す *inclusio*」



そのうえで注目すべきことは、この「神の絶対性を表す *inclusio*⁶⁾」が10回繰り返され、その全てを覆うように「空の空、伝道者は言う、全ては空」と空しさ、儚さを示す1:2と12:8が囲い込んでいることである⁷⁾。これを「人の空しさを表す *inclusio*」と呼ぶことにする。コヘレトは、「神の絶対性を表す *inclusio*」から外れた人間の空しさを「人の空しさを表す *inclusio*」という構造で更に囲い込み、1:2-12:8の最終形態を完成させている。ここに神から外れた者の空しさを語ろうとするコヘレトの計画的意図がある。

さらに、この構造は神から外れた人間の空しさだけを語るに留まらない。この構造には隠された物がある。それを、明らかにする為にコヘレトは、人間の空しさを拷問のように徹底的に語り続けた⁸⁾。

つまり、神が隠されている。人間の能力は、越えられない絶対的権威の前では力を失い、「空しい⁹⁾」。それゆえに、コヘレトは、5:6「神を畏れよ」と確言し、隠されていた神の存在を明らかにするのである。人間の限界を認識したコヘレトは、人間自身の抱える闇、罪、空を徹底的に語ることによって、それを裁き(11:9)、回復し(12:7)、肯定される神がおられることを、かえって

強烈に示したのである。このようにして、コヘレトは構造を用いて隠されている神を明らかにしたのである。コヘレトは神を中心に置く¹⁰⁾。そして、これがまさにコヘレト書の極めて重要な中心主題である¹¹⁾。

従って、「神の絶対性を表す *inclusio*」「人の空しさを表す *inclusio*」が、計画的に配置され、中心主題「神を指し示す」を告げるという意図をもって全体が構成されているのである。

第2節 主題からの区分け

我々は、コヘレト書全体にある主題「神を指し示す」を見出した。さらに、コヘレト書全体は「神の絶対性を表す *inclusio*」、つまり「神の創造と終末」パターン → 「創造・与える」A 神のもとから → B 神の業は分らない → C carpe diem → D 神の不変・神を畏れる → E 全てあった物はまた → F 裁き → G 神のもとへ 「一つのところへ」 → を1区分として、全体で10区分に分けられている。つまり、神は人を創り死をもって神のもとへ帰らせる。しかし、再び神はまた同じように人を創り、死をもって神のもとへ帰らせる。全ては神のもとから始まり同じ神のもとで終わる。この「神の絶対性を表す *inclusio*」の一回りが1区分を構成し、全体に渡って循環するという繰り返し構造を見せているのである。

第3節コヘレト 11章, コヘレト 3章, イザヤ 49章の主題的関連 (省略)

第二章 11章5節-12章7(8)節の主題的考察

第1節 最終形態から主題へ (省略)

第2節 主題と pericope (区分) 11:5-12:7(8) との関係 (省略)

第3節 11:5-12:7(8) の chiasmic (集中) 構造から主題へ

11:5-12:7(8) は非常に重要な個所である。なぜなら、この個所では、神の創造用語¹²⁾が多数使用されるのみならず、神の存在を意識し神を敬う内容¹³⁾

が記され、さらには、「創造主を覚えよ」と訳すことが可能な言葉が記されているからである。

そこで、最終形態から導き出された中心主題「神を指し示す」を、今度は 11:5-12:7 (8) の角度から検証してみる。具体的にはまず、既に導き出された中心主題「神を指し示す」と一致するのかどうか、一致するのなら中心主題「神を指し示す」をほのめかす導入の言葉が存在するのかどうか。更には、中心主題に確証を与えるような根拠が 11:5-12:7 (8) に存在するのかどうかである。

その為に 11:5-12:7 の内容についての流れを、図 2 で紹介する。11:5-12:7 には、明確に α , β , γ , β' , α' , ①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑧', ⑦', ⑥', ⑤', ④', ③', ②', ①', で対応する chiasmic 構造が見られる。そこで、この構造を構成している対応関係をどのように規定することができるのか、図 2 を用いて示すことにする。

図 2 11:5-12:7 の構造

11:5	α	① 「妊婦の胎内のように」
11:5-6	β	② 神の支配「生命・自然の始まり」「若いうちは」
11:7		③ 「 <u>光は快い</u> 。 <u>太陽</u> を見ることは目のために <u>良い</u> 」
11:8		④ 「多くの年生き」
		⑤ 「闇の <u>日々</u> を <u>覚えよ</u> 」(<u>願望</u>)
		⑥ 「空しい」
11:9		⑦ 「若い者、若い時、若い日々…… <u>楽しめ</u> 」(<u>命令</u>)
		⑧ 「 <u>心</u> の道に、目の見るところに <u>歩め</u> 」(<u>命令</u>)
	γ	⑨ 神の裁きを <u>知れ</u> (<u>命令</u>)
11:10		⑧' 「 <u>心</u> から悲しみを <u>除き</u> , 身体 <u>の痛みを</u> <u>除け</u> 」(<u>命令</u>)
		⑦' 「(除け⑧') ……若い時も、青春も」
		⑥' 「空しい」
12:1		⑤' 「若い <u>日々</u> に 創造者を <u>覚えよ</u> 」(<u>命令</u>)

④「年をとり」

12 : 2 ③「太陽と光, 月と星」

12 : 3-6 β'②' 神の支配「生命・自然の終り」「年をとる」

12 : 7 α'①'「霊はこれを与えた神に帰る。」

I. α① (11 : 5) — α'①' (12 : 7) の対応関係

最初の創造と最後の終末の業を行なわれる同じ「神」によって、①—①'の枠組みができています。α①とα'①'には、「与える」「行なう」「帰る」という創造用語が共に使われている。

α①	11 : 5 יַעֲשֶׂה (行なう)	11 : 5 בְּכֶטֶן (母の胎)	11 : 5 מַעֲשֶׂה (働き・業)
α'①'	12 : 7 נָתַןָה (与える)	12 : 7 הָאֱלֹהִים (神)	12 : 7 כִּשְׁהִיָּה (~である)
	12 : 7 נְהָרִים (息・霊)	12 : 7 הָעָפָר (塵)	12 : 7 הָאָרֶץ (地)
	12 : 7 וַיָּשָׁב (帰る) 2 回		

II. β② (11 : 5-6) — β'②' (12 : 3-6) の対応関係

神の支配の始めと終りが、同じ自然界に対する等しい興味をもって対応している。この自然の用語は隔たった 11 章と 12 章の両方において、創造主を想起する直接のテキストを形成している。

命令の役割

11 : 1 と 11 : 2 と 11 : 6 には、共通する倫理的命令と、それに続く動機づけの繰り返された構造があることで知られている¹⁴⁾。これは倫理的命令 (a) と動機づけ (b) が一組となってリズムカルに 3 回繰り返され、また「あなたは知らない」という不可知論「隠された不確定な将来」が際立つ形になっている。

「隠された不確定な将来」は、β②「生命・自然の始まり」—β'②'「生命・自然の終り」で顕著に現れている。β② 11:5-6 は「神のみ業を知らない」「あなたはいつさいを行なわれる」「あなたは成功するか知らない」「うまくいくか

知らない」と、人間には何も予見することができないことを語る。このようにβ②で始められた「生命・自然の始まり」を支配している神の絶対性は、人間には隠されたまま始められ、β'②'「生命・自然の終り」まで隠されたまま続く。

この倫理的命令はコヘレト書全体を中心主題へと向かわせるという役割がある。つまり、「将来の不確定性」と「倫理的命令」の矛盾は、知らされていない「隠された不確定な将来」を、知らされていない者として、神の可能性にかけろという「倫理的命令」となって、「神を指し示し」ているのである。

将来を知らされていない非決定論のもとで、自由意志と自らの決断、将来への責任を託された人間が、神のもとへ帰るまで神に可能性をかけるがゆえに、労働への命令が可能なものとなるのである。

そして、これがまさにコヘレトが掲げる「神を指し示す」という中心主題に由来している。将来を知らされていない者がγ⑨「神の裁きを知れ」(11:9)という勧告によって「神を指し示され」、神に可能性をかける将来へと檄されるのである¹⁵⁾。すなわち、「隠された不確定な将来」は、「神を指し示す」ことを中心主題とする根拠となっている。

III. ③ (11:7) — ③' (12:2) の対応関係

③ (11:7) וּמְתוֹק הָאוֹר וְטוֹב לְעֵינַיִם לִרְאוֹת אֶת־הַשֶּׁמֶשׁ

「光は快い。太陽を見るのは目に良い。」

③' (12:2) עַד אֲשֶׁר לֹא תִחַשֵּׁךְ הַשֶּׁמֶשׁ וְהָאוֹר וְהַיָּרֵחַ וְהַכּוֹכָבִים

「太陽，光，月，星々が暗くなる前に」

③—③'共に、太陽、月、星の光は人間の活動を明るくする良い物であるという認識に立っている。そして、それを活かして積極的な生命の活動へと促している。この奨励の意向と、同一語彙が③—③'を拘束していることから、対応関係を規定することができる。

IV. ④ (11:8) —④' (12:1) の対応関係

④ (11:8) **הָרְבָּה יְהִיָּה הָאָדָם שָׁנִים** כִּי אִם 「しかし、多くの**年**、生きながらえても」

④' (12:1) **עַד אֲשֶׁר לֹא - יָבֹאוּ יְמֵי הָרָעָה וְהָיְעוּ שָׁנִים**

「悪しき日々が来る前に、**年齢**に達する前に」

④—④' は共に、長生きしたときの事を仮定条件として語っている。

④ (11:8) **בְּכֻלָּם יִשְׂמַח** 「その全てにおいて自分を喜ばせても」

④' (12:1) **אֲשֶׁר הָאָדָם אֵין-לִי בָהֶם חֶפֶץ** 「わたしには何の**喜び**もない」と言う、

ここで、真実な喜びについて無知であるなら、長生きも空しいことであると語る。つまり、③③' の快い様々な光も、④④' の長寿も、喜びも、最終的には⑤「闇の日々も数多くあることを覚えよ」⑤'「創造者を覚えよ」と言う命令の前に、快樂の限界を知らされるのである。それは同じく創造の神の裁きの力へと繋がっていく。

そこでコヘレトは、chiastic 構造からも分かるように、①①'・・→③③'→④④'→⑤⑤'・・から、いよいよ chiastic のクライマックスとなる中心⑨へと向かわせる。それは、限りあるものから、永遠なものへ、不確実なものから、確かなものへと、我々を⑨「神の裁き」の焦点へ向かって召集するのである。

④④' 11:8 と 12:1 には「年」が対応している。pericope 11:5-12:7 内には「年」が、この2箇所において登場しているが、その他にも「時」¹⁶⁾ についての言及は特徴的であり、次のようにあげることができる。

④④' 11:8, 12:1 「年」 ⑤⑤' 11:8, 12:1, ④ 12:1, ⑦ 11:8 「日」

⑦⑦' 11:9, 11:10 「若い時」 ⑦⑤' 11:9, 12:1 「若い日々」

④' ③' ②' 12:1, 2, 6 「～ない前に」

これらの特徴的な「時」の言及は、11:5-12:7 の pericope に時間的枠組みを形成する機能を果たしている。これが、中心主題へ関連を持って機能し、「神を指し示す」作用を果たすことになる。この検証について、考察をさらに展開したい。

V. ⑤ (11:9) —⑤' (12:1) の対応関係

⑤ (11:8) כִּי־הִרְבֵּה יְהִיּוֹ הַחֹשֶׁךְ וַיִּזְכֹּר אֶת־יָמָיו 願望

「暗闇の[日々]も数多くあることを 覚えよ。」

⑤' (12:1) בְּחַוְרֹתָיִם בְּיָמָיו וַיִּזְכֹּר אֶת־בּוֹרְאָיו 命令

「あなたの若い[日々]に、あなたの創造者を覚えよ。」

動詞（願望、命令）は、読者の関心を chiastic 構造の中心へと向かわせている。⑤⑤'の他に、⑧⑧'も動詞自身の対応をもたせながら、中心⑨へと召集している。

11:8 ⑤ [闇の]日々を 覚えよ וַיִּזְכֹּר (願望)

11:9 ⑧ [あなたの心の道に歩み, あなたの両目の見るところに歩め] וְהָלַךְ (命令)

⑨ [神の裁きを知れ] וְדַע (命令)

11:10 ⑧' [あなたの心から悲しみを除け, あなたの身体から痛みを除け]

וְהָסֵר וְהַעֲבִיר (命令)

12:1 ⑤' [若い日に 創造者を覚えよ] וַיִּזְכֹּר (命令)

⑧—⑧'は、⑧「歩め」(命令)が⑧'「除け」(命令)で対になっている。

⑤—⑤'は、⑤「覚えよ」(願望)と⑤'「覚えよ」(命令)で対になっている。そして、これらの関心は、⑨「知れ」(命令)における「神の裁き」へ召集し、中心主題「神を指し示す」ことに集中されて行く。

特徴的な「時」の言及「年」、「日」、「～ない前に」等の時間的枠組みと、それにおいて展開している動詞（願望、命令）は、共に中心主題「神を指し示す」ことへと我々を召集する集中構造の役割を果たしている。つまり、動詞（願望、命令）と時間的枠組みが切り離せない関係で、pericopeの構成要素として結びつき、「～ない前に」によって際立たせる明暗において、動詞（願望、命令）が神の存在を明らかにし、最終的な中心主題へと導いているのである。

このことは、中心主題が「神を指し示す」であることに、十分な根拠となりうる重要な構成要素であって、中心主題にさらなる確証を与えている。

VI. ⑥ (11 : 9) —⑥' (11 : 10) の対応関係

11 : 8 ⑥ 空しい הָבֵל

11 : 9 ⑨ 神の裁きを知れ וְדַע יְבִיאֶךָ הָאֱלֹהִים בְּמִשְׁפָּט

11 : 10 ⑥' 空しい הָבֵל

この「空」の対置も、「神を指し示す」ことへ向けての集中構造であることは言うまでもない。

VII. ⑦ (11 : 9) —⑦' (11 : 10) の対応関係

⑦ 若い者, 若い時, 若い日々……楽しみ שִׂמְחָה בְּיָמֵי בְחֻרוֹתֶיךָ, בְּיָלְדוּתֶיךָ, בְּחוּר

(命令)

⑨ 神の裁きを知れ וְדַע (命令)

⑦' (除け⑧') 若い時も, 青春も (וְהָסַר וְהַעֲבִיר (命令)) תִּילָדוֹת וְהַשְׁחָרוֹת תִּילָדוֹת

時間的枠組み「若い時」、「若い日々」において、動詞（命令）が、「神を指し示す」中心主題へと召集する集中構造は、ここでも見られる。

VIII. ⑧ (Qoh11 : 9) —⑧' (Qoh11 : 10) の対応関係

⑧ 心 לִבְךָ וּבְמַרְאֵי עֵינֶיךָ וְהִלַּךְ בְּדַרְכֵי לִבְךָ

⑨ 神の裁きを知れ וְדַע יְבִיאֶךָ הָאֱלֹהִים בְּמִשְׁפָּט

⑧' 心 מִלְּבָבְךָ וְהַעֲבִיר רָעָה מִבְּשָׂרְךָ

⑧ あなたの心^⑧の道に、あなたの両目の見るところに歩め (命令)

⑨ 神の裁きを知れ (命令)

⑧' あなたの心^{⑧'}から悲しみを除け あなたの身体から痛みを除け (命令)

⑧「心」と⑧'「心」の対応、⑧「目」と⑧'「身体」で、体についての対応が見られる。ここでも動詞（命令）の役割は⑧「歩め」、⑧'「除け」が対になって、chiastic 構造の中心⑨「知れ」という「神の裁き」へ召集し、中心主題「神を指し示す」ことに集中していることが分かる。

コヘレトは全ての身体を活用し、目に従い、心を尽くして「喜び」を全身で

得るように勧める。この「喜び」に伴うのは、神が人の行為を裁くという確かな知識である。我々が希望を置く神。この神が、裁くという確かな知識は、「喜び」を抑制するものではなく、逆にそれを強調し方向づけるねらいがある¹⁷⁾。

従って、ここまで語られてきたコヘレトからの「心の道に歩め」「目の見るところに歩め」「悲しみを除け」「痛みを除け」という「喜び」への命令は、「喜び」を神の賜物として受けとめることを勧めているのである。しかも、その先にある我々が希望を置く神。この神の「裁き」を覚えることは「喜び」の根拠となるゆえに、コヘレトは神の裁きの確かな知識を「知れ」と命令しているのである。

すなわち、このコヘレトの意向は、「神を指し示す」という中心主題へと召集する chiasitic 構造において、構造の中心に引き寄せられる程に命令が集中して現われることで、「神の裁き」を際立たせている。

IX. γ, ⑨ (11:9) を中心とする chiasitic 構造

γ, ⑨ וְדַע כִּי עַל-כָּל-אַלֶּה יִבְיֹאֵךְ הָאֱלֹהִים בְּמִשְׁפָּט

γ, ⑨ しかし、知れ。これら全てのことに於いて、神があなたを裁きに導くことを。

コヘレトの最終的に見つめているのは、始めであり終りである、創造主なる神が実行する確かな最後の裁き¹⁸⁾である。これを「知る」者は、「喜び」をもって人生を謳歌することができる¹⁹⁾。その為に「神の裁き」という極点は、それを囲む命令によって、「喜び」を獲得する為の「神の裁き」の知識へと我々を導く。よって、命令が集中する chiasitic 構造の中心に向けて「神を指し示す」エトスは増強され、これまで所々でほのめかされた中心主題は、この「神の裁きを知れ」の命令によって最高度に明らかにされるのである。つまり、コヘレトは意図的に chiasitic のフォーカスを中心主題「神を指し示す」に向けているのである。

このように 11:5-12:7 は、統語論的な構成と chiasitic 構造のかなり精巧な計画を通して、途中で重要な人間の制限条件を指摘しつつ、神の裁きが「神を指し示す」中心主題へと導く構造をもっているのである。

第4節 フレデリクス、オグデン、ヴィッツェンラートの違い

12:1-7の謎めいた内容から、この個所は隠喩で捉えたり、*allegory*²⁰⁾で捉えるといった内容的な解釈に大きく依存してきた。それに対して、フレデリクス、オグデンは、語彙、統語論、修辞学から構造的な枠組みを確立した。

しかし、ヴィッツェンラートの構造分析を用いて完成させたオグデン²¹⁾の構造には、不十分な点が見られる。それは、この構造の図式を見ると明らかであるが、12:3-8の構造が過小に評価され、11:7-12:2に偏った構成となっているという点である。つまり、この構造は12:3-8を除いたおおざっぱな構成で完成されており、11:7-12:8を *pericope* とした場合、コヘレト書に適応する明確な構造の決定は完成されていないと言える。

次に登場したのがフレデリクスである。彼は、11:3-12:2の範囲で「雲と雨」—「裁きの神」—「雲と雨」という11章から12章の自然の描写を分離することなく、気象学的²²⁾な見方から見事に整った *chiastic* 構造を見出した²³⁾。

ここで彼が強調するのは「雲と雨」である。彼の主張する *chiastic* 構造の最初と最後はA「雲と雨」、A'「雲と雨」で対比されている。自然の描写の最初から最後を通して、神の時における権威が自然の終りと人間の寿命を決定し、それが恐ろしい「雲と雨」として迫ってくるのだと解釈する。

しかし、この *chiastic* 構造が与えるコヘレト書全体への影響力を考える時、不十分な点が見出される。それは、フレデリクスの主張する *chiastic* 構造は、11:3-12:2内で見事に整った内容で完結しているが、そのために、この *pericope* のみの孤立した構造に終始してしまっているという点である。つまり、コヘレト書全体を通して主張する主題から無関係に、この個所でしか妥当しない孤立したメッセージ性の弱い構造を選び取ってしまっている。彼は「雲」「雨」に注目し、老年、寿命、死に重点を置くが、この *pericope* におけるコヘレト書全体への役割に注目しなければならない。

以上の結果から、まずヴィッツェンラート、オグデンが示す構造は、12:3-8が欠ける不十分な分析であることが分かる。

そこで、今回、我々が行った構造分析は、11:5-12:7を *pericope* とし、11

章を含め構造分析の範囲は大きく、後半の 12 章を支えることができた。また、これまで 12:1-7 が多くの曖昧な部分を持つために、不明瞭な所は省かれて分析されてきたが、今回、その不明瞭な個所は、不明瞭な個所同士に対応が確認され、前方と後方にしっかりと対応関係のある **chiastic** 構造が見出された。

また、フレデリクスメッセージ性の弱い構造に対して、今回我々の見出した 11:5-12:7 の **chiastic** 構造は、コヘレトの中心主題から浮かび上がった **pericope** の範囲内での **chiastic** 構造であるため、確実に中心主題を備えた構造分析を行なうことができた。

従って、今回の構造分析で、これまでの各研究による構造の不足を補いつつ、コヘレトの中心主題から逸脱することなく、**pericope** の根拠も維持しながら、**pericope** 全体の対応関係を網羅して、中心主題へと導く **chiastic** 構造を掴むことができたのではないだろうか。

第 5 節 主題から 12:1a בּוֹרֵאֵיךְ (ボーレーカー) を「創造主」と訳す可能性

本論文ではコヘレト書の中心主題とそれを備えた構造について検証してきた。その結果、コヘレト書後半部には「神を指し示す」という中心主題の示唆が存在し、**chiastic** 構造によっていよいよその中心は「神を指し示す」というクライマックスへと集中されていくことが分かった。

そこで、この論文で明らかにされた中心主題、**chiastic** 構造に基づいて、最後に一つの非常に困難な解釈上の問題に取り組み解決を試みる。

それは、旧約聖書全体においても特殊な 12:1a の בּוֹרֵאֵיךְ (ボーレーカー) の解釈である。これを読み解くことは、創造世界全体に向けられたコヘレト自身の懐疑の理由と、コヘレトの描く終末的世界観を読み解くことにも繋がる。

① בּוֹרֵאֵיךְ (ボーレーカー) の読み替えについて

12:1a の בּוֹרֵאֵיךְ (ボーレーカー) は בָּרָא (バーラー)「創造する、形づくる、切り出す、太らせる」のカル. 分詞. 複数. サフィックス 2 人称. 男. 単数. 合成が用いられている。この形は、旧約聖書中この箇所のみであり、非常

に特殊な使われ方である。そこで、これを「あなたの創造主たち」と訳そうとする時、様々な議論がなされるのである。

なぜなら、コヘレト書において「あなたの神」を表現するとき、**אלהים**²⁴⁾ (エロヒーム) を使用し、全体で 40 回も使用されているからである。では、なぜ 12:1a でのみ、**בוראִיךָ** (ボーレーカー) [カル. 分詞. 複数. サフィックス 2 人称. 男. 単数. 合成「あなたの創造主たち」] と言い換えが突然されるのであろうか。

この釈義上の障害を、合理的に解釈するために **בוראִיךָ** (ボーレーカー)²⁵⁾ の読み替えが試みられてきた。

- 1, **בוראִיךָ** (ボーレーカー) は語根の基本的な意味は健康を示すものとし、「あなたの健康」と訳す²⁶⁾。
- 2, **בוריך** (ボーレーカー) とし「あなたの活力」と訳す²⁷⁾。
- 3, **בורך** (ボーレカー) は BHS アパラタスでは「あなたの穴」という訳語が提案されている。「穴」は「墓」を意味し、12 章で「死」を連想させるものとして訳す²⁸⁾。
- 4, **בארך** (ベエルカー) は「あなたの井戸」とし、12:6 **בור** 「井戸」を示唆するものとして関連づけ、「井戸」と訳す。箴言 5:15 では「井戸」が妻の比喻として用いられていることから、「あなたの妻」と訳す²⁹⁾。
- 5, **בוראִיךָ** (ボーレーカー) は付加であると考え、文脈上整合性を欠くものとして、取り除いて解釈する³⁰⁾。
- 6, コヘレトは、これら全ての解釈の余地をわざと持たせ、複数の意味で捉えることができるように書かれている³¹⁾。

② **בוראִיךָ** (ボーレーカー) の用法を、旧約聖書全体から探る

では、どの解釈がコヘレトの真意であるか読み解くために、まず **בוראִיךָ** (ボーレーカー) の語根 **ברא** (バーラー) に着目してみる。

ברא (バーラー) は、旧約聖書中 54 回の使用が確認される。そのうち 51 箇所 **ברא** (バーラー) は、「創造する」で使用されている³²⁾。さらに、主語は

必ず、「主」であり「神」である。つまり「創造する」と意味を取るとき、常に、主、神に関して用いられる単語である。

次に、**בּוֹרְאֵיךְ** [カル. 分詞. 複数. サフィックス2人称. 男. 単数. 合成]の用法であるが、これは、旧約聖書中、唯一コヘレト 12:1a で現れる。しかし、旧約聖書中での **בָּרָא** (バーラー) 分詞は 13 回使われ、全て神に関して使用されている³³⁾。その内イザヤ 43:1 とコヘレト 12:1 でのみ同じ用法が用いられている。この2つを比較してみる。

イザヤ 43:1 は、[カル. 分詞. 単数. サフィックス2人称. 男. 単数] **בְּרָאִיךָ יְהוָה** 「主はあなたを創造する者」と訳す。

しかし、コヘレト 12:1 は、[カル. 分詞. 複数. サフィックス2人称. 男. 単数] **בּוֹרְאֵיךָ** (ボーレーカー) であり、イザヤ 43:1 の分詞. 単数に対して、コヘレト 12:1 では分詞. 複数が用いられるという違いがある。けれども、この複数は「尊厳の複数」³⁴⁾ と理解し、単数と見なすことが可能である。なぜなら、複数形の **אֱלֹהִים** (エロヒーム) と意味が一致するからである。

さらに、**בָּרָא** (バーラー) の使用のうち、「創造主」と訳す箇所は、イザヤ 40:28 [カル. 分詞. 男. 単数] **בּוֹרֵא** (ボーレー) 「創造者、創造された方」、イザヤ 43:15 [カル. 分詞. 男. 単数] **בּוֹרֵא** (ボーレー) 「創造主」の2箇所ではっきりと確認することができる。

このように、旧約聖書の他の諸文書での用例から確認されるこれらの要因から、コヘレト 12:1 **בּוֹרְאֵיךָ** (ボーレーカー) は、「あなたの創造者」と解釈する可能性が現れた。

③ 創造用語としての **בָּרָא** (バーラー) (**בּוֹרְאֵיךָ** ボーレーカー) の役割

旧約聖書には、イスラエル特有の創造用語³⁵⁾ が存在し、主に **עָשָׂה**³⁶⁾ (アースハ) 「行なう、造る」、**נָתַן**³⁷⁾ (ナータン) 「与える」、**יָרָא**³⁸⁾ (ヤレー) 「畏れ」、**בָּרָא**³⁹⁾ (バーラー) 「創造する」がそうである。この創造用語は、1～3章の前半と、11～12章の後半に集中して現れているのがコヘレト書の特徴である。

עשה「行なう、造る」と、ירא「畏れ」の使用は、神が創造を「行なう」、神の「行為」が暗示され、それは畏れられる神の行為であり、神への畏敬を含む用い方がなされている⁴⁰⁾。特に12章において、神が霊を与え נתן、神が行い עשה、それゆえ神は畏れられる ירא と、神を主語として使用されている。

ここで、注目したいのは זכר (ゼコール)「覚える」と ירא (イエラー)「畏れる」の使用である。この2つの動詞は、関連使用の特徴(イザヤ54:4, イザヤ57:11, 詩篇111:5)がある動詞として捉えることができる⁴¹⁾。この特徴は、コヘレトにおいても類似しており、12章以外に、5章でも似たものが確認される。

5:6 את־הָאֱלֹהִים יִרָא 「神を 畏れ よ」

5:19 הִרְבֵּה זִכֹּר 「(人生を)くよくよ 覚え ない (神が喜びで満たすから)」

従って、この連結使用から12:5 יִרָא (イーラーウー)「畏れ」、12:13 יִרָא (イエラー)「畏れ」と12:1 זִכֹּר אֶת־בּוֹרְאֵיךָ (ゼコール エト ボーレエーカー)「あなたの創造者(?)を 覚え よ」が意味上対応していると考えてもおかしくない。

これによって、בּוֹרְאֵיךָ (ボーレエーカー)の神との関連は強められる。「創造主を覚えよ」と解釈する可能性は大いにある。

④ זִכֹּר (ゼコール) の特徴

創造用語と、זִכֹּר (ゼコール)の使用から、בּוֹרְאֵיךָ (ボーレエーカー)の神との関連が色濃くなったが、より確かな בּוֹרְאֵיךָ (ボーレエーカー)の解釈に踏み込むために、ここで זִכֹּר (ゼコール)の特徴を取り上げたい。

זִכֹּר (ゼコール)は過去の出来事において、神とイスラエル、またはイスラエルの民との関係性を表現する為に用いられる⁴²⁾。

זִכֹּר (ゼコール)は、神との応答関係で使用され、神との関係の回復、絶望の中での過去の出来事の想起として用いられているのである⁴³⁾。それゆえ、12:1aにおける זִכֹּר (ゼコール)も、神との関係性を表現していると思なせるであろう。さらに、12:1 זִכֹּר אֶת־בּוֹרְאֵיךָ (ゼコール エト ボーレエーカー)「あな

たの創造主(?)を覚えよ」の前に 11:5 「全ての事を創られる神」と記されており、創造者としての神認識があることは見逃せない。

以上の考察から、12:1における זָכוֹר (ゼコール) は、神との直接的な関係が「創造主を覚える」ことにおいて可能となるといえるであろう。

⑤ コヘレト書の構造と中心主題から בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー) の解釈へ

本論文では、コヘレト書に終始一貫して流れる「神の創造と終末」パターンと、その構造の根拠となる「神を指し示す」という中心主題の存在を明らかにし、立証してきた。それゆえ、当然 בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー) の解釈もそれと関係すると見るのが妥当である。つまり「神の創造と終末」パターン、「神を指し示す」中心主題から考えると、בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー) を「創造主」と解釈することが正しいであろう。

⑥ בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー)「創造主」と捉えるコヘレトの神認識

以上の諸検討から בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー) は「創造主」と解釈することが適切であると結論する。これが、文脈上最も相応しく、コヘレトの意図と一致する見解である。

確かに、12:1 בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー) は、旧約聖書中唯一この1箇所だけであり、解釈上非常に困難で特殊な用例である。だからこそ、ここにコヘレトの意図的なものが存在する。コヘレトは、12:1 בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー) が持つ、複数の意味をあらかじめ認知していたであろう。また、墓、井戸などの読み替えが可能であることも知っていたであろう。敢えて、コヘレトは複数の意味による読み替えを期待して用いたのではないだろうか。要するに、いくつかの可能性を持たせ、複数の解釈で読める不可解な特殊性を際立たせ、意図的に読者に混乱を与えているのではないだろうか。

なぜなら、神の存在それ自体が非常に不可解であり、謎めいているからである。それを、コヘレトは、謎めく特殊な בּוֹרְאֵיךְ (ボーレーカー)「創造主」によって、表現したのである。現実はこの世で生きる我々が、神を見出すこと

ができず、時に厭世的に、時に懷疑主義に陥り生きるほかないことを、コヘレトは知っているのである。それゆえ、創造主を簡単に表現してしまうのではなく、この謎めいた不可解な用例に秘めさせて、不可解な創造主の存在を **בּוֹרֵאֵךְ** (ボーレーカー) という表現に託したのである。

この特殊な用例で、解釈し難く表現することによって、神の存在の秘儀—神の創造の業—を見極めることができないことを、我々にはっきり強調し訴えているのである。これがコヘレトの描く神認識である。

結 論

現代社会は、コヘレトの生きた世を彷彿させる。「コヘレトの言葉」に描き出された社会の矛盾や困難、権威にへつらう人間の姿と無常観は、そのまま現代社会における、人間存在の根拠を照らし出しているのではないだろうか。コヘレトは、「神」と「空しさ」のあいだで極めて深い思索を行なった。彼はとことん人間の悲慘を描いた。「空の空、いっさいは空である。」我々は、この無価値無存在感に困惑し戸惑いながらも、全ての肉なる者の儚さが、他の何よりも我々の心を激しく打つことに同意せずにはおられない。すべてを無に帰してしまう恐るべき「空しさ」が、まさに人間による計画の中心に襲いかかる。そして結局は「すべては空しい」という告知によって、地位と力の差異の全てが取り除かれてしまう。ところがコヘレトは、この恐るべき無価値無存在感によって、神の臨在の意識に反応した。不信仰の潜むこの人間のはかなさの実感が、絶望へと通じるのに対して、彼はそこから、揺らぐことのない唯一の確かなものに出会ったのである。コヘレトは「すべて徹底的に行え」と言う。最善を尽くし、うまく行かない。そして、すべてのものが崩れる「空しい」瞬間を味わう。人間の努力を否定する論理ではなく、人間の限界を認識するまで、知的活動を徹底すること。知恵の限界を知恵自身が認識すること。そして、この極限の認識において、神を知り、知恵の尽くされたところで神と出会うと、コヘレトは考えるのである⁴⁴⁾。

本論文を要約すると、第一章では、コヘレト書に存在する中心主題「神を指し示す」を見出した。そして、コヘレト書全体の構造は、この中心主題へ向かって規則的な意図を持って組み立てられていることを明らかにした。更に、第二章では、11:5-12:7の chiasmic 構造が、中心主題「神を指し示す」へと導いていることを明らかにした。

本論文の研究によって見出された中心主題と構造から、コヘレト独自の世界観が明らかにされた。特に、終末思想である。彼は人間の終局に至るまで徹底して神に望みをおき、コヘレト独自の終末思想を示す。預言者イザヤには、定まった終わりの時がある。メシアを待ち望み、終末に望みおき、そこへ向かってすべての時が流れて行く。コヘレトも同じく人間の終局を神にあずける。しかしコヘレトは、定まった終局を知らず、来ては去る幾代もの人間たち、太陽、風、海に流れ入る川、果てることない単調な繰り返しの世界を描くのである。しかし、「神」のもとから、「神」のもとへと繰り返す。コヘレトはメシアに向かって時が流れる終末を知らない。しかし、彼は「神」のもとから「神」のもとへと向かうのであって、神から少しも逸脱しなかった。これがコヘレトの極めて強固な信仰から描く神を中心とする世界観である。コヘレトの終末思想は、メシアの来る定まった終局を見つめているのではなく、有無を言わさぬ圧倒的な力で終わりををも支配しておられる「神」の絶対的存在を見つめているのである。

もはやコヘレトの考察全体は、でたらめに作り上げられているのではないといえよう。この書の構造は、計画的に並べられた「繰り返し」があり、コヘレトの苦悩する個人が叙述される仕方で最終的に「神を指し示す」ように展開されているのである。そして彼は、「空」と対照的に「神」をこの書全体の中心におき、この世の全ての中心に「神を指し示し」たのである。コヘレトはただ一瞬たりとも、無神論の可能性を考えなかった。たとえ懐疑主義者であったとしても、彼にとって神は疑いようのない事実であった。このように「コヘレトの言葉」は、我々に潜む「空しさ」を徹底的に明らかにしたからこそ、神の絶大な力が全てに勝ることを指し示めす力強い福音となったのである。

(やざわ・みさこ)

注

※本稿は、2004 年度、東京神学大学に提出した修士論文を要約したものである。実際の目次は以下の通りである。

序論

第一章 本文研究

第1節 私訳 Qoh11 章5節-12 章8節

第2節 本文批評

第二章 Qoheleth の中心主題とは

第1節 「Qoheleth の言葉」の主題による統一

第2節 主題からの区分け

第3節 Qoh11 章, Qoh3 章, Isa49 章の主題的関連

I . Qoh3:11-3:20, Qoh11:5-12:7, Isa49:1-49:9 の語彙による関連

第三章 Qoh11 章5節-12 章7 (8) 節の主題的考察

第1節 最終形態から主題へ

第2節 主題と Qoh11:5-12:7 (8) との関係

第3節 主題と pericope11:5-12:7 (8) との関係

第4節 Qoh11:5-12:7 (8) の chiasmic 構造から主題へ

I . α ① (Qoh11:5) — α' ①' (Qoh12:7) の対応関係

II . β ② (Qoh11:5-6) — β' ②' (Qoh12:3-6) の対応関係

III . ③ (Qoh11:7) — ③' (Qoh12:2) の対応関係

IV . ④ (Qoh11:8) — ④' (Qoh12:1) の対応関係

V . ⑤ (Qoh11:9) — ⑤' (Qoh12:1) の対応関係

VI . ⑥ (Qoh11:9) — ⑥' (Qoh11:10) の対応関係

VII . ⑦ (Qoh11:9) — ⑦' (Qoh11:10) の対応関係

VIII . ⑧ (Qoh11:9) — ⑧' (Qoh11:10) の対応関係

IX . γ ⑨ (Qoh11:9) を中心とする chiasmic 構造

第5節 Fredericks, Ogden, Witzenrath との違い

第6節 主題から Qoh12:1a בּוֹרֵאשִׁיךָ を「創造主」と訳す可能性

結論

- 1) 12:1「創造主を覚えよ」の解釈は、この論文の第二章第5節で詳しく説明している。
- 2) A. J. O. van der Wal は、イスラエル特有の創造用語 **עשה**, **ברא** について叙述し、S. Lee の意見と同意している。それは、創造用語として **עשה** (行なう、造る), **נתן** (与える), **ירא** (畏れ), **ברא** (創造) をあげることができ、Qoheleth の多くの箇所でのこの用語が使用され、神の創造主としての存在を強調している。[その他のテキスト Job32:22 **עשני**, Job35:10 **עשי** でも神の創造用語が使用されている。] A. J. O. van der Wal. “Qohelet 12:1a A Relation Unique Statement in Israel’s Wisdom Tradition.” p.413.
- 3) A～Gが全体で10回繰り返される。

全ては空 1:2

- ① A1:4 → B1:11 → C2:1 → D → E2:11 → F2:14 → G2:16
- ② A2:16 → B2:19 → C2:14a → D2:24b → E2:26 → F3:1 → G3:11a
- ③ A3:11a → B3:11b → C3:12 → D3:14 → E3:16 → F3:17 → G3:20
- ④ A3:20 → B3:21 → C3:22 → D5:6 → E → F5:7 → G5:14
- ⑤ A5:14 → B → C5:17 → D5:18 → E → F6:4 → G6:6
- ⑥ A6:6 → B → C → D6:10 → E6:12a → F6:12b → G7:12
- ⑦ A7:12 → B7:13 → C7:14 → D7:18 → E7:24 → F7:26 → G7:29
- ⑧ A7:29 → B8:7 → C8:15 → D8:12 → E8:17 → F9:2 → G9:3
- ⑨ A9:3 → B9:5 → C9:7a → D9:7b → E9:11 → F10:14 → G11:5
- ⑩ A11:5 → B11:6 → C11:7 → → E11:8 → F11:9
→ C11:9 → → F11:9
→ A12:1 → → D12:1 → F12:7 → G12:7

全ては空 12:8

- 4) 「神の絶対性を表す inclusio」は、① 2:16 と 3:10, ② 3:10 と 3:20, ③ 3:20 と 5:14, ④ 5:14 と 6:6, ⑤ 6:6 と 7:14, ⑥ 7:14 と 7:29, ⑦ 7:29 と 8:10, ⑧ 8:10 と 9:2, ⑨ 9:2 と 11:5, ⑩ 11:5 と 12:7 の10回。図1を参照。最初に神が人間を創造される話と最後に神が人間を神のもとへ帰せる終末の話とで、内容を挟み込む構造ででき上がっている。
- 5) S. Otomo *Kohelet und die Apokalyptik* 1999 pp.66-73. p.222.Tafel 1,2,3.

この論文で、Carpe Diem を中心とした Qoh3:1-3:17b の chiasitic 構造が論じられている。この分類項目を参考に、他の箇所の構造分析を試みてみた。その結果 Qoh2:16-12:7 渡る構造パターン「神の絶対性を表す inclusio」(図1)が浮か

び上がった。

- 6) ① 2:16 と 3:10, ② 3:10 と 3:20, ③ 3:20 と 5:14, ④ 5:14 と 6:6, ⑤ 6:6 と 7:14, ⑥ 7:14 と 7:29, ⑦ 7:29 と 8:10, ⑧ 8:10 と 9:2, ⑨ 9:2 と 11:5, ⑩ 11:5 と 12:7 の 10 回。
- 7) Qoh1:2 と 12:8 の Inklusio は、多くの研究者によって解釈されている。
W. P. Brown, M. V. Fox, G. S. Ogden, R. E. Murphy, C. L. Seow, など多数。
- 8) 「空」の使用箇所…Qoh1:2, 1:14, 2:1, 2:15, 2:17, 2:19, 2:21, 2:23, 2:26, 3:19, 4:4, 4:7, 4:8, 4:16, 5:6, 5:9, 6:2, 6:4, 6:9, 6:11, 6:12, 7:6, 7:15, 8:10, 8:14, 9:9, 11:8, 11:10, 12:8.
- 9) Qoheleth は, לֵבָב を用いて, 次の事柄を「空しい」と表現する。
① 快楽・愉悅 (2:1, 7:6, 9:9, 11:8, 11:10) ② 労苦 (2:11, 2:21, 2:23, 2:26)
③ 愚者・賢者 (2:15, 2:19, 6:2, 7:15, 8:10)
④ 生・死 (2:17, 3:19, 6:4, 6:12, 8:14) ⑤ 成功・妬み (4:4, 4:16)
⑥ 満足 (4:8, 5:9) ⑦ 言葉 (5:6, 6:11) ⑧ 全て (1:2, 12:8)
Fox, Michael V. “The Meaning of Hebel for Qoheleth.” JBL105 (1986) p.413 では、8 つに分類して解釈している。
- 10) Qoh7:12 「人間、その一生の後はどうなるのかと教えてくれるものは、太陽の下にはいない」と人間は何も知らず、人間が創造世界の中心でないことを語っている。
- 11) 図 1 を参照。Qoheleth 書は、神を円の中心に置き、神から外れた円の外側に「空しさ」を置く構造を伴っている。
- 12) 創造用語について、この論文の第一章 1 節を参照。
- 13) 神を畏れ敬う箇所は、Qoh3:13, 5:6, 7:18, 8:13 で見られる。
- 14) 小友聡「最悪のシナリオを想定して—コヘレト 11 章 1-6 節をめぐる考察」(『神学』64 号, 2002 年), 79 頁。
- 15) C. -L. Seow, “Qohelet’s Eschatological Poem,” JBL118 (1999) pp.209-34. 楽しみは神の賜物にも、また、今この場での命令にもなり、この詩は造り主を覚えることにその主なる強調点を置いているという。
- 16) Ogden, G. S. “Qoheleth XI 7-XII 8:Qoheleth’s Summons to Enjoyment and Reflection”, VT 34 (1984) pp.26-38.
- 17) ブラウン, W. P. (小友 聡訳)『コヘレトの言葉 現代聖書注解』日本基督教団出版局, 2003 年, 194 頁。

(コヘレトにとって、人生を楽しむことが人生の最大の命令となるのである。)

……ゴルデイス『コヘレト—人物とその世界』335頁, トーナー『コヘレトの言葉』353頁)

- 18) 裁きの神は, Qohélet では以下の個所に描写がある。

מִשְׁפָּט «裁き」 Qoh6回, Qoh3:16 (人の裁き), Qoh5:7 (人の裁き), Ecc 8:5 (人の裁き), Qoh8:6 (神の裁き), Qoh11:9 (神の裁き), Qoh12:14 (神の裁き)。

שָׁפַט «裁き」 Qoh1回, Qoh3:17 (Qal.impf3ms. 神の裁き)

- 19) Qoh5:1-6 で Qohélet の神の懲罰の信念を認めるだろう。Fredericks,D.C.

“Life’s Storms and Structural Unity in Qohélet 11.1-12.8”, *JSOT*52 (1991) p.101.

- 20) allegory の最も初期の挑戦の一つは, Qoh12:2-5 が死の哀歌であると論じたチャールズ・テイラーによってなされた。Douglas B. Miller op.cit.,p.148. によって, Charles Taylor, *The Dirge of Coheleth in Ecclesiastes XII*. London: Williams & Norgate, 1874.

- 21) Ogden,G.S, op.cit.,pp.27-38.

- 22) 他に F. W. C. Umbreit, C. D. Ginsburg, M. Leahy, O. Loretz が気象学からの読み方を主張している。

- 23) Fredericks, D.C. op.cit., pp.95-114.

- 24) מַלְאִכָּה は, Qohélet で 40 回使用。Qoh1:13, 2:24, 2:26, 3:10, 3:11, 3:13, 3:14, 3:14, 3:15, 3:17, 3:18, 4:17, 5:1, 5:1, 5:3, 5:5, 5:6, 5:17, 5:18, 5:18, 5:19, 6:2, 6:2, 7:13, 7:14, 7:18, 7:26, 7:29, 8:2, 8:12, 8:13, 8:15, 8:17, 9:1, 9:7, 11:5, 11:9, 12:7, 12:13, 12:14. Mandelkern, S., *Veteris Testamenti Concordantiae Hebraicae atque Chaldaicae*, Berlin, 1937. pp.87-91.

- 25) בָּרָא は, 旧約中, 「創造する」42回, 「創造者」3回, 「選択する」2回, 「作る」2回, 「やせる」2回, 「派遣する」1回, 「される」1回, 「太る」1回と合計 54 回使用されている。Brown Francis, :Driver. S.R, :Briggs.C.A, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Peabody, Massachusetts, 1996. p.135.

- 26) C. -L. Seow. *Ecclesiastes, A New Translation with Introduction and Commentary* (AB), New York 1997 pp.351-352.

- 27) ibid.

- 28) ibid.

- 29) ibid.

- 30) ibid. しかし, A. J. O. van der Wal は, もし編集的付加として取り除いて理解しようとした場合, 文脈的に全く意味をなさないと主張している。A. J. O. van der Wal. op.cit., pp.413-418.

- 31) Kamano はこれをアンタナクライシス (1 つの単語「בִּוּרְאִיָּה」に、複数の意味がある) と位置づけ、複数の意味で解釈することを主張する。 Kamano Naoto, *Cosmology and character : Qoheleth's pedagogy from a rhetorical-critical perspective*, (Beihefte zur Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft), Berlin, 2002. pp.222-227.
- 32) Mandelkern, S., op.cit., pp.233-234.
Lisowsky, G. *Konkordanz zum Hebraischen Alten Testament*, Stuttgart, 1958. p.280.
David J. A. Clines. *The Dictionary of Classical Volume II*, Sheffield, 1995, p.258.
- 33) Isa40:28, 42:5, 43:1, 15, 45:7 (2x), 18, 57:19, 65:17, 18 (2x). Amos4:13, Qoh12:1 の 13 回。Mandelkern, S., op.cit., pp.233-234.
- 34) Gesenius' Hebrew Grammar (ed. E. Kautzsch; ty. A. E. Cowley) §124k.
- 35) ibid.
- 36) עָשָׂה (行なう, 造る) … Qoh43 回 Qoh 1:9, 1:9, 1:13, 1:14, 2:2, 2:3, 2:5, 2:6, 2:8, 2:11, 2:11, 2:12, 2:17, 3:9, 3:11, 3:11, 3:12, 3:14, 3:14, 4:1, 4:3, 4:17, 6:12, 7:14, 7:20, 7:29, 8:3, 8:4, 8:9, 8:10, 8:11, 8:11, 8:12, 8:14, 8:16, 8:17, 9:3, 9:6, 9:10, 9:10, 10:19, 11:5, 12:12
Mandelkern, S., op.cit., pp.918-919. Lisowsky, G., op.cit., pp.1117-1137.
- 37) נָתַן (与える) … Qoh25 回 Qoh 1:13, 1:13, 1:17, 2:21, 2:26, 2:26, 2:26, 3:10, 3:11, 4:17, 5:5, 5:17, 5:18, 6:2, 7:2, 7:21, 8:9, 8:15, 8:16, 9:1, 9:9, 10:6, 11:2, 12:7, 12:11
Lisowsky, G., op.cit., pp.967-982.
David J. A., Clines, Volume. V, op.cit., pp.813-814.
- 38) יָרָא (畏れ) … Qoh9 回 Qoh 3:14, 5:6, 7:18, 8:12, 8:12, 8:13, 9:2, 12:5, 12:13.
Mandelkern, S., op.cit., pp.503-506. Lisowsky, G., op.cit., pp.632-635.
David J. A. Clines, Volume. IV, op.cit., pp.276-281.
- 39) בָּרָא (創造する) … Qoh1 回 Qoh 12:1 前掲注 (107)
- 40) Qoh5:6, 7:18, 8:12-13, 12:13 等。
- 41) Isa54:4 「恐れるな…再び思い出すな」 לֹא תִזְכֹּר עוֹד אֱלֹהֵי תִירָא
Isa57:11 「誰を畏れ…恐れ覚えないのか…畏れないのか」 לֹא תִזְכֹּר לֹא תִירָא
Ps111:5 「主を畏れる者に」 לִירְאֵי תִפְדֶּה
- 42) Theological Dictionary of the Old Testament vol.1, p.385.
- 43) イスラエルが神との本質的な時を共有し、その応答関係に基づいて様々な事

柄が常に今のこととして経験されることを **זכר** (remember) を用いて表現している。

- 44) 左近淑『旧約聖書緒論講義』(左近淑著作集第三卷) 教文館, 1995 年, 372 頁。